

平成23年度 第6回まちづくりトーク

会 議 録

学校支援地域本部

「市立学校だからこそできる、地域との協働による
学校づくり」

2011年（平成23年）12月10日（土）

16:00～17:00

市民交流センター第2・第3会議室

【司会（福本課長）】 皆さん、準備よろしいでしょうか。これからまちづくりトークを開催させていただきます。本日はご多忙のところお集まりいただきまして、本当にありがとうございます。司会進行は私、市民協働課の福本が行います。よろしくお願いいたします。

まちづくりトークなんですけれども、実は今日が本年度の第6回目ということになります。実はこれは今年最後のまちづくりトークでもあります。今年最後のテーマ、今、前の方に出ておりますけれども、「市立学校だからこそできる、地域との協働による学校づくり」といったことで1時間、皆さんと私たちのまちに合った学校支援地域本部のあり方について考えてみたいと思います。

今回のまちづくりトークなんですけれども、11月27日から4回シリーズで開講しているずし楽習塾の講座「今変わる初等・中等教育ー地域は学校とどう協働するかー」、これを基調講演と位置づけて開催をするものでございます。

こちらの講座に参加されていられなかった方にとっては、若干情報が不足する面もあるかと思いますが、せっかくの機会ですので、積極的にご参加いただければと思います。

本日はゲストをお呼びしていますので、ご紹介いたします。学校支援地域本部事業として夜स्प、土曜寺子屋などを展開している杉並区立和田中学校校長の代田昭久様です。逗子市学校支援地域本部実行委員会委員長で久木小学校の地域コーディネーターとしてご活躍の平唯介様です。どうぞよろしくお願いいたします。

続きまして、本日の出席者を紹介します。小田副市長です。教育委員会より竹村委員長です。同じく、横地委員です。教育長の青池委員です。

ありがとうございます。では、早速トークに移りたいと思います。進行を市長にバトンタッチします。市長、よろしくお願いいたします。

【平井市長】 皆さん、こんにちは。1時半から今、先ほどご紹介いただいた楽習塾の講座で代田先生ね、大変刺激を受ける、素晴らしいお話をいただいたんです。今日は学校支援地域本部についてのトークということで、1時間しかないんですけれども、ぜひいろんな皆さんご意見をいただければと思います。この4時から参加の人、ちょっと手を挙げていただけますか。どれくらい…半分ぐらいですかね。それでは今、ご紹介いただいた平さんと代田先生の方から、それぞれの取り組みについて少し先にお話をいただいて、それからまた皆さんとの意見交換をしたいと思いますので、よろしくお願いいたします。最初に平さんから、よろしくお願いいたします。

【平】 逗子市の学校支援地域本部実行委員会委員長の平でございます。よろしくお願いいたします

ます。せっかくですので、座って、ゆっくりと話をさせてください。よろしく申し上げます。

本日、杉並区の和田中学校の校長先生、代田先生がゲストということでおみえになっていて、そちらは中学校ですので、私の方からは小学校の取り組みを中心に話をしていきたいと思います。返子市では平成21年度から学校支援地域本部事業、市内小学校5校、中学校3校でスタートしております。私の子供が通っている久木小学校では、その約半年ぐらい前から、このような形で学校支援、地域で学校支援するという取り組みが始まっています。その初めのところでは、こういったところからスタートしたかといいますと、学校の廊下のペンキを塗ったり、教室の掲示板をつくったり、そういった環境整備が中心のところからスタートした、こういった事業でございます。そこからだんだんと、子供の生活の場を支えるという環境支援から、子供の学びの場を支えるという学習支援の方へとシフトしている、こういう段階に久木小学校ではあります。それぞれ返子市内に8校ある中で、地域性を生かして独自に進んでいるんですけども、今日この場ではちょっと時間が短いので、そのすべての発表はせずに、ちょっと久木小学校のことを中心に話をしていきたいと思います。

特に小学校というのは、1年生、6歳、7歳ぐらいの子供、本当に手をとって道路を渡るところから支援していかなければいけないというのが小学校。そして、そういった子供たちが、子供たちの中でトラブル、いろいろなことがあっても、日々の学校生活の中で、そういったところをみんなで切磋琢磨して乗り越えていながら、いろいろなことを学んでいくというのが小学校の学校支援活動の大きな一つであると思うんですけども。その中で、そういった学校の中で保護者や地域は何ができるのかというと、やはり小学校に入った子供たちを一から手を引いて、ああするんだよ、こうするんだよという、そういった支援ではなく、先生と子供たちが一緒になって学びというものを作っている場を支えていってあげる、それが学校に対する支援なのではないかということを強く意識しまして、教職員がストレスなく授業に集中できる環境を作っていく、支援が教職員の負担にならないように、お互いに協働していこうという、そういった取り組みの内容です。

そのために、保護者の協力体制を確立して、保護者が学校にいろいろな形で支援するために足を運ぶ、そうした中で保護者みずからが参加、学校支援経営に参画して、学校に対していいイメージを持ってもらおう。そして地域の私たちで、過保護にならない程度に、今ですと登・下校の安全を見守っている見守り隊の方もいらっしゃいますし、そういった方々が学校に足しげく通ってもらうことで、学校に対していいイメージを持ってもらうというのも一つの大きなねらいでも

あります。

また、最近ベテランの先生たちの退職が増えているという問題も一つあります。その中で、学校にはどんどん若い先生が入っている。それに伴った支援ですね。そうした先生たちを地域・保護者が一緒になって支援、支えて育てていく、そういった発想も一つあります。例えば久木小学校では本年度はちょっと悪天候のためできなかった、開催を見送ったんですけれども、学校で大きなフェスティバル、これもいろいろな形で学校でやっているんですけれども、そうした中で若い先生と保護者が一緒になって当日作業をすることでコミュニケーションを図ってもらおうとか、さまざまそうした狙いをもって取り組みをしています。

そうした活動をしながら、本当に私たちの学校支援の活動というのはプラスアルファの活動であるということですね。基本的には先生と保護者、先生と子供で100%の授業をしているという課題設定の中で、マイナスを補うのではなくて、地域や保護者が入ることによって、さらに効果を生み出しているというのが一つのねらいでありまして、最近の、特に今年の久木小学校でのこういった学びの支援のトピックをちょっとお話しさせていただきます。昨年まで、今年もやっているんですけれども、学校から20メートルぐらい離れたところに大きな畑を持っていらっしゃる方がいまして、その方の畑を借りて2年生が大豆を育てるという学習を始めました。やはりプロが支えることで、きちんと大豆の成長が見れるんですね。よく1年生など小さな植木鉢にいろいろなものを育てて、2年生になるとミニトマトを育てたりするんですけれども、やはりそうした小さな植木鉢よりも、大きな畑の中でダイナミックに育てる方が作物の成長がしっかり見れるわけなんです。そうした中でやっていて、昨年何となく始まっていたようなんですけれども、3年生が地域の社会科見学のような形で、豆腐工場の見学を始めたわけですね。じゃあ、そういうことならばということで、それも積極的に支援をし始めまして、2年生は大豆を育てて、それを収穫して、きな粉にして食べた。そしてその翌年、大豆が加工される工場を見て、その大豆が豆腐になるところを見学し、その場でお豆腐づくりも体験するという、2年間にわたる大きな学びの機会を支える、作っていくことができました。そうした取り組みをしているところでございます。

ちょっと時間の関係で、そろそろ時間なんですけれども、そうした形で、環境支援から学びの支援へという形で進化している逗子市の現状を少しご報告させていただきたいと思います。ありがとうございました。

【平井市長】 ありがとうございます。拍手。1時半からの代田先生のお話、私も2時間聞いた

んですけれども、ぜひ、ちょっと今さらながらリクエストもあれなんですけど、何で地域が学校と関わるのか。その部分をね、中学校ですけれども、どういう学びを子供あるいは地域でつくり出していくのか、その辺を語っていただけるとうれしいななんて思いますけど。あとはお任せします。

【代田】 皆さん、こんにちは。ありがとうございます。杉並区立和田中学校の校長の代田と申します。5分ほど今、市長の、なぜ学校に地域が関わらなければいけないのか、ここについて今、私の考えを述べさせていただければなというふうに思っています。

私、民間人校長で、4年前まで普通の起業した会社をやっていました。突然、校長先生になれるということで、杉並区の公務員の採用試験を受けて受かったんですが、学校現場は想像以上に大変でした。多分、教員の人たちは、何で大変かというと、世の中の変化に対して教育行政というのは多分戦後変わってないんじゃないかなというのが一番大きいです。多分一つ大きく変わっているのは、保護者の意識。要は、義務教育で自分の子供は学校に受けさせる義務があるところから、サービス業としてこれやってくれ、そういう意識の要望がすごく高いなど。それを私自身はクレームとは思いません。学校をよくするための意見だと思っているので、まさにクレマー的な親はいますけれども、それにしても学校改善をしろとは言いません。ただ、450名の生徒の900人の保護者の対応はすごい大変なんです。これを日々、先生たちが多分30年前と全然別の次元でやっているんですね。生徒も、インターネットの普及によってゲームとか携帯とか、これに閉じこもって活動している。こんな実態かと、とにかくびっくりしました。その中でやっている先生たちは忙しい。授業づくりのために邁進したいにもかかわらず、保護者の対応、成果、すごく大変だなというのが私の実感です。

大変なのは、世の中どこも大変なんですけど、多忙感という意味で言うと、やらなくてもいい仕事を結構学校がやらなければいけないというふうに思っているのが、今、私の入った率直な感想です。要するに、学校からどんどん力が奪われていってしまう。この中で、一つの大きな解決策としては、奪われた学校の力をもう一度学校の中に力を取り込んでいくという意識、発想の転換が必要なんじゃないかなというような大きな考え方です。要するに地域の人たち、保護者、いろいろなかわる人たちが学校を経営参画する。そういうことをやらなければいけないし、やる以外、公立中学校の永続的な発展はないんじゃないかなというふうに思っています。というのは、教員の先生方は、常に3年、5年で異動していってしまいますね。ただ、ずっと生きているのは地域の人たちなので、この人たちがいる種の知見を持って学校を育てていくという仕組みをつく

らない限り、どんどんどんどん学校の力が弱くなり、そして時々、いい先生が来る、というような光景も、生徒にとっては山あり谷ありの学校経営になってしまう。これが現状だと思います。

いかに平準化して恒常化していい学校をつくるためには、地域の力を取り組んでいかなければいけない。これが根本的な概念だし、21世紀公立学校の生き残る道はこれしかないくらいの考え方でやっています。ただ、私が8年目でようやく何か形になったというのが正直なところなんです。1年目、2年目、何をやってたかという、今ありましたように、逗子市と同じ状況です。1年目やったことは、芝生の管理をやったんです。芝生の管理を地域の人たちにきれいにやらせよう。2年目、次はじゃあ図書館の司書役のおばさんに来てもらって、近所のおばさんに。そこは2年目。3年目に、じゃあもうちょっと土曜日の補習事業を4～5人でやった。それは3年までの藤原先生がやってたところでした。今、8年目を迎えてどんな状況になっているかという、土曜日に450名の中で200名の生徒が地域本部の主催する土曜日学校に来ます。土曜日寺子屋と言われる補習授業、これは大学生が中心となって、40名が登録していますが、20名ぐらい毎回来てもらって、補習をします。これに参加する生徒が100名ぐらい。英語コース、これは英検に特化した学びを提供する。これは100名ぐらい生徒が来ている。そして夜スペで20人ぐらい生徒が来ている。こういったところに行くと、非常に見映えもいいし、すごいなあと思うんですけど、ここに行くまでは最初の3年間があり、僕が入ったときも地域本部で生活指導が乱れるとよく言われました。土曜日に私服で行きます。時々不要物、持ってきちゃいました。そういうものを学校に持ち込む地域本部の生活指導体制は許せない。こういう立場の先生がいっぱいいました。そういうところを何とか理解、相互理解をしながら、何とかここまでできているというのか8年間の歩みで、一朝一夕になったわけじゃなくて、ただ理念、方向性としては先生たちと学校と保護者と、みんなで力を合わせて地域立、地域で学校をつくろうと、揺るがない信念でやっていて、ようやくたどり着いているという現状です。ただ、まだまだ後継者の問題、人材の問題、いろいろあるんですけども、そこまでできていることによって、今日は皆さんにそのノウハウとか、こういう課題なんか、こんなふうに解決してきたかというのを共有できて、お話ができればいいなというふうに思っています。本日はよろしく願いいたします。

【平井市長】 今、本当にざっくりなんですけど、前段の1時半からの話を聞いていただいた方には、もっと詳しくわかっていらっしゃると思うんですが、何しろ和田中は夜スペでマスコミに取り上げられて、かなり話題になりました。でも、今お話があったように、土曜日寺子屋、地域の人が土曜日に集合して、いろいろな学びの支えを、地域の人がみずからやられてきたと。そ

れにプラス夜スペという、いわゆる学習塾がいて、もっと難しい勉強をやれる機会も作った。そういういろんな経緯が8年間あって、今あるということなんですね。だから、逗子の地域本部も3年目に入りました。今、平さんがおっしゃるように、久小では今度は学びの場を作っていこうという、そういう動きも出てきているんですけども、じゃあ今日お集まりの皆さんは、学校の先生もいれば地域の方もいれば保護者、PTAの方もいらっしゃると思うので、それぞれに取り組んでいらっしゃると思いますから、ぜひぜひいろいろな自分たちの事例、あるいは悩んでいること、いろいろご意見あるかと思うので、おっしゃっていただければなど、そんなふうに思っています。どうでしょう。どなたか、まずはじゃあ。1時半からの講座に出ていらっしゃるって、感想でもいいですけど。ご発言ありませんか。

じゃあ、1時半から出ていた人。先生の方が多みたい。先生に聞くというのも一つだね。

【市民】 久木小学校の鈴木です。ちょっと話は飛んでしまうんですけど、最終的に市長がおっしゃっていた言葉で印象に残っているのは、個人の損得なしに子供たち、社会に貢献できるような場を考えるという意味で、こういう夜スペとか寺子屋とかというのは横があまりつながらないんだけど、ただ、もう一つ、「よのなか科」、あれはすごく僕は共感できるなど。その部分というのは、学校というよりも家庭の方でもできることのかなと。ただ、家庭でできない場合に、学校がそこをうまくとりつないで、そういう様ないろいろな人の話を聞けるというのは、それでもいいのかなと思います。逗子もいろいろな著名人じゃなくても、いろいろな技を持っている人とか、先ほど平さんから出た畑のプロフェッショナルがいるので、そういうところをもっともっと充実させながら、やっていければ、もっともっと逗子市の教育も発展できるのかなと思います。以上です。

【平井市長】 はい、ありがとうございます。地域の方とか、地域本部で日頃苦勞されている方。じゃあ、後ろの方で。どうぞ。

【市民】 私は地域の方で、逗子小学校卒業、久木中学校卒業生です。非常勤講師で高校、県立高校を17年ぐらい教えていたんですけども、数学についてはアレルギーになっている生徒がかなりいたんです。そうした時に、小学校、中学校でつまづいているのではないかと思うと、何か本当に学校に協力できることはないかということのをいつも思いながら、できない状態でした。でも、本当にちょっとしたことでつまづいて、何かがきっかけですばらしい才能を発揮するお子さんもいるわけですね。そういう時に何かお手伝いできるようなことがあればと思いながら、ずっと何もできないで来ていて、申しわけない気持ちでいます。何か本当に学校でできることがあ

りましたら、ぜひ教えていただきたい気持ちです。

【平井市長】 はい、ありがとうございます。もう少し、どなたか。後ろで、最初から聞いていらっしゃる。

【市民】 保護者の山崎なんですけれども、1時半から伺わせていただいて、私は保護者の立場から、先ほど校長先生がね、親をどうやって巻き込むか、いっぱいお話ししてくださったので、校長先生の力量にも、保護者がどれだけかわれるか、保護者の力を引き出せる力を私は期待したいと思いながら、先ほどのお話、聞かせていただきました。協力できる方は、すごく前向きにどんどん協力をしていただけるんですけれども、きっかけがあれば協力できる方、全くできない方いろいろあると思いますけれども、そういった、どこかに眠っている力を引き出せていただけるような校長先生の力があれば、すごく保護者もどんどん参加できるのかなと思って聞かせていただきました。

【市民】 私は沼間中学校の今、地域コーディネーターという立場なんですけれども、二瓶と申します。沼間中学校も開校以来二十何年、平成からですからね、その間ずっと関わっています、地域として。先ほど代田さんがおっしゃったように、学校は変わっていく、地域は変わらないといつかね、変わらないのがいい面も悪い面もあるんでしょうけども。今おっしゃったお話とか、先ほどの先生のお話とか、例えば沼間中学校の場合は、サマーチャレンジということで、自主事業を行っているんですね。その時に地域講師が10名ぐらい来たりしてやっているんですよ。ですから、やっぱり呼びかけがないんじゃないのかな。呼びかけ方によって、地域にはいくらでも人材はいるんですよ。特にこれからね、これは教育だけに限らず、いろいろなジャンルで、それこそ逗子都民とか言われる人がたくさんいるわけですよ。そういう人材が眠っている、もったいないですよ。それを活性化するというのが、やっぱり地域本部の仕事になっているかもしれないと思っております。ありがとうございました。

【平井市長】 「よのなか科」というのを和田中学がやっているのを、前段聞かれないとちょっと何のことかわからないかなと思うので、もう一度ちょっと代田先生に、「よのなか科」でどんなことをして、どんな苦勞をして、どんな子供たちの反応があるかというのをお話しいただけますか。

【代田】 「よのなか科」というのは、理念としては学校の中に世の中を取り込んじゃおうという意味です。社会が抱えるいろいろな問題を中学生のころからみんなで考えてみよう。こういう趣旨でやっています。大体専門家を1人呼んで、その人の講演スタイルではなくて、その問題に

ついて考え、最後にコメントをもらうというようなスタイルです。テレビで取り上げられていたのは、すごく有名なところなので、蓮舫大臣を呼んで、君たちが今受けている子ども手当、必要か必要じゃないかという議論をします。そこにはちょうど税の問題もありますので、消費税の問題とか所得税の問題を考えながら、社会科の問題に絡めて蓮舫さんにどういう趣旨でやっているのか。実際にはここに保護者が入るといいんですよね。保護者が入ると何でいいか。子供たちはこういう意見を言い出しています。子ども手当、もらっているけれども、多分うちでは教育費に使われてないと思います。であるんだったら、多分パチンコじゃないかなとかとウケを取る生徒がいるですけど、であるんだったら、お金のやりとりで意味がない、政治的な工夫がないではないかという子が出てきます。ここに親がいるわけです。じゃあ、教育費に使っている親はどのくらいいるんでしょうかと。8割くらいは多分親に使っているというような事実を子供と家庭とやることによって、じゃあその子ども手当というのはばらまきか、本当にいい施策か。これ、正解はないんですよね。正解はないんだけど、考えてみるというテーマでやっています。

先ほどちょっと1時からの授業でやったのは、携帯問題、中学生の携帯問題をブログの事件でものすごく問題になっていますね。ブログを君たちはやめるというルールをみんなで作るかどうか、こんな議論をしてみました。そこにはミクシーの開発者に来てもらって、今、現状でどのくらいのトラブルが起こっているのかというのを伝えてもらいました。

ということですね、今、世の中で起こっている答えのない問題を議論します。3年間卒業するまでに、大体50回ぐらい授業をします。そうすると、何が変わってくるかということ、非ニューススキルという専門用語なんですけれども、学ぶ意欲を計る測定があって、学習意欲、物事に対する勉強意欲が上がったとか、物事を考える時に理由や考え方を大事にするようになったとか、相手の意見を尊重するようになった。こういうものが飛躍的に上がってきました。あわせて学力が向上しているというのもわかりました。要するに、一つの手法として世の中を学校の中に取り込んで、そういう議論をさせることによって子供たちに社会性も含めて、先ほどおっしゃっていただいた自分のこと、自分の損得だけじゃなくて、社会全体に視野を広げて議論をするということを中学生の時から訓練させる意義は大きいかなというふうに思っています。

ちょっと先ほど意見があったんです。これはじゃあ地域本部と結びつかないという話なんですけど、これ、裏と表なんですよ。ここに地域の人たちが来て、一緒に議論をする。だから、先ほど言いましたように…あ、もう一人ありました。黙っていたって地域の住民が一度離れちゃったものは来ないんです。学校としてはいかに来てもらうようなきっかけを作るか、呼びかけを作る

かが「よのなか科」なんですね。学校でこんな授業をやっているから、おもしろい。今の地域本部長は3代目になるんですが、そこにたまたま来ていた地域の人で、伊藤忠を早期退職しましたという人が来たので、その人を口説いて地域本部長にしました。こういった出島、長崎の出島を作ることによって、地域が集まってきて交流の場になる。そういう意味で言うと「よのなか科」というのは装置になっていて、そういう人集めにもなっている。そこにどんどんどん人に来るきっかけになるというのは、表と裏の戦略でやっています。

【平井市長】 ありがとうございます。どうでしょう、日ごろ地域本部なりの問題で苦労されている人とか、あるいは参加して一緒に汗かいているとか、そんな声もいただければなと思います。

【市民】 青少年指導員という組織がありましてね。私も昔やっていて、私が導入したんでけれども、ディベート大会というのをやっていますね。今年は原子力問題をやったんです。是か非か。それがあんな原発事故になって、リアルな話になったんですけど、今回は、来年1月はサマータイム、日本にサマータイムを導入するのは是か非かなんていうテーマでやるんですね。これはまさに自分たちの身の回り、あるいはごみの問題もやりましたし、いろいろな問題をやりました。葉山と逗子が合併したらどうだとかね。まさに「よのなか科」じゃないですけども、そこにまさに中学生からそうした社会性とか、世の中の必要性ということを意識させる。もちろん先輩も応援に来ますしね、父兄も巻き込んでやっていますし。僕はやっぱり、あえて地域本部ということじゃないんですけども、そういうことは逗子はもう今年16回目になるんですね。やっているということを紹介しておきたいと思います。

【平井市長】 ありがとうございます。そういうすばらしい取り組みもあるということで、それがいろいろな学校は学校でね、もっともっと広がっていくと、本当に豊かになって、教育の場になるなというふうに思いました。さあ、どうでしょう。あ、手が上がりました。マイク。

【市民】 逗子小学校の保護者なんですけれども、こんにちは。私は4時からの会に出席をさせていただいていますので、内容自体はあまり把握はしていないんですけども、逗子小学校は校長先生、教頭先生、先生方はじめすごく積極的に地域とともに行事をやっていただいております。例えばサマースクールとか、あと学校へ行こう週間とか、あとさまざまな行事やイベント、こういったものにすごく力を注ぎ時間も注いでいただいて、とても楽しい学校です。ただ、例えば私もPTAで働いているんですけども、PTAはじゃあどうかと言われたときに、例えば食事をしようとか、あるいは家庭科室を掃除しようとか、そういうふうな呼びかけに応じてくれる父兄の方が非常に少ないんですね。開かれた学校ですごく楽しいにもかかわらず、じゃあいざ呼びか

けをしてみると、ちょっと、え、これだけですかということがありますけれども、例えばそういうふうな時にたくさんの保護者の方に参加していただけるようになるには、ちょっとアドバイスをいただければうれしいなと思います。

【代田】 アドバイスになるかわからないんですが、行ってみたいというふうに思わせるメッセージの発信の仕方も大事かなと思います。「掃除しましょう」なんてやったら、僕も行かないですよ。掃除しましょう。でも、「子供たちと料理をつくりましょう」、行きますよね。ということじゃないかなと思います。やっぱりボランティアなので、お金もうけじゃないので、どうそこで、メリット・デメリットじゃないですよ、自分の達成感が味わえるのかというのを、ちゃんと提示してくるというのは大事なことだなというふうに思います。

これもうまくいったから言うんですけども、今回の震災をどう生かすかというの、すごく大事な学校としての責務だなと思いました。というのは、支援活動をするというのは各学校でやったと思います。お金を集めたり。これ、どこも一番うまく達成感が味わうようにやるという頭を絞ってやる。例えば、だから「募金活動やりましょう」じゃ集まらないですよ。その時に、1回目はたまたまだったんですが、和楽器だけでやるコンサートの人たちが自主的に来ていただいて、これは大事なんですけども、南相馬から来ていただく。来ていただいて、みんなで今の状況を共有しようよということで、地域と保護者に言ったら、生徒400名だけど、400名以上の人たちが来ました。そうすると募金が集まりますよね、いっぱい。で、集まるのを、じゃあ赤十字だと何かまいちうまくいかないから、ある特定の団体にやろうということで、和田中の卒業生のカタさんの活動に渡そう。そういうすごい細かいんですけども、行った価値とか達成感が味わえるようなところは、一歩進んで考えられるようになったかなと思います。

これは校長一人が考えているんだけど、生徒からいろいろなアイデアはくれるわけです。これではやっぱり集まりませんよ、とか。まさに「よのなか科」というか、私が今、学校経営方針で生徒にすごく言っているのは、相手の立場になって考えるということじゃなくて、相手の身になって考える。もう立場を超えて、その人だったらどうしたらいいかということをやったときに、生徒からすごくいい意見が出たんですよ。この支援活動をやりましょうといったときに、もう廃品回収とかいろいろ難しいだろうから、今、何が必要なのかと考えたときに、夏着、夏物を集めたら役立つんじゃないかというのが生徒会からあったんです。聞いてみたら案の定、冬物しか届いてないから、ゴールデンウィークはすごい汗かいて、新品も届かない。もう相手の身になったというのがようやく成果に結びついて、今度は手紙が来ますよね。そうした手紙が来たら、や

っぱりうれしかった。こちらが仕掛けを作っていく人間の意識としては、そういった細かいところまでどうやったら来てくれるのか、どうやったら達成感を味わってもらえるのかなという、まさに相手の身になった仕組みづくり、戦略というのが必要だし、それは一人が考えてもだめで、いろいろな組織があると、これやったらいいんじゃないのというふうに言ってくれる。そこがやっぱり地域の人材いっぱいいるので、いいんじゃないかなというふうに思っています。

【平井市長】 はい、ありがとうございます。どうでしょう。じゃあ、手挙げてくださいね。マイクを持っていきます。

【市民】 沼間学校地域の雨宮といいます。過去にPTAをやりまして、もう後期高齢者ですから、実際学校に関わることはありませんけれども、前市長のときに、全部農村地帯だったんですね、一部小坪は漁村ですけど。全部東京・横浜の中の一地区みたいになっちゃっている、現状は。ですから、やはりふるさとというか、故郷というものを、生まれれば故郷ですからね、それで今いろいろやっています。その次、市長とマンションのことをやったときに、逗子の原風景を残すということを市長、地域につくりたいということをして、合同ヒアリングやりまして、3年間、市も援助してくれまして、大体30人ぐらい集まって、その場を作りました。意外にこれが学校で田植えと稲刈り、来てくれまして、現在はホテルを鑑賞したり、生物多様性とか、畑づくりとか、多少やりました。だから、そういうのはひとつ、まちづくりのこれに当てはまりませんが、そういうプロジェクトを作っていくという会も現在、逗子にあります。

【平井市長】 はい、ありがとうございます。校長先生、どなたか…あ、いらっしゃいましたね。

【市民】 沼間中学校の校長の服部でございます。今日はお話聞けなかったんです。今、4時からのお話聞いただけでも、大変参考になりました。どうもありがとうございます。今、募金活動等のお話を聞いて思い出したんですけれども、本市でも各学校、教育委員会の方からも情報をいただきまして、いろいろな方を仲立ちとして支援していくような、そういうのもしていただいたんですけれども、または神奈川新聞社に寄付するとか、いろいろな方法はあるんですけれども、本校は東逗子という、沼間地区の地域からお誘いがありまして、東逗子ふれあい市場ですか、4月に早速餅つきとかいろいろ、フリーマーケットとかの中に生徒会を誘っていただきまして、参加して、東逗子の団体として、まず第一弾として被災地激励の寄せ書きとか、いろいろと、東逗子の一員として届けていただきました。その後なんですけど、子供たちもあくまでも保護者にいただいたお金じゃなく、お風呂掃除やって10円とか、肩たたきで5円とか、そういうお金を持ち寄ってというような運動も同時に始めまして、お金がたまったときに、さあそのお金をどちら、

逗子市役所をお願いするという手もあるんですけども、どういうふうな形でと、やっぱり達成感という部分でね、いろいろ子供たちも検討しまして、そこに地域支援本部が登場するんですが、たまたま地域支援本部地域コーディネーターが福島の出身で、原発の立ち退き区域内の葛尾村というところを立ち退いてしまった大竹校長という方の学校が、ご出身のところにご縁があってというようなことで、子供たちの意を受けて、実際にふるさとに帰っていただき、その校長先生の方にじかに沼中の様子をお話しいただき、渡していただきました。その結果として、大変ご丁寧な状況を説明したお手紙を7月に大竹校長からいただきまして、それは7月の夏休み前の式の時に、生徒会担当が朗読をして、25分あまりの長いお手紙だったんですけども、全校生徒が270名ちょっとしかいないんですけど、みんな真剣に聞くことができて、その後、各クラスでいろいろ感想とかを話し合ったという経過がございます。今度また秋口に、地域に出てボランティア活動をする中でご寄附いただいたり、そういういろいろなところで、また次にどのような手段でご寄附していくかというところを話し合っている最中がございますけど、やはり本当に悲しい出来事ではありましたが、地域支援本部の仲立ちというのがありまして、子供たちの思いが先方に通じたという事例の紹介でございました。

【平井市長】 はい、ありがとうございます。いかがでしょう。私も地域本部を立ち上げて3年目を迎えて、さっきの平さんがおっしゃっていたような子供たちの学びのサポートを地域の力でできないかな、ということを感じて、育ててほしいなと思っていて。というのは、小学校を卒業するときに、例えば卒業生が全員が掛け算九九できるかといった時に、必ずしもそうでないとした時に、それをじゃあ逗子全体で、例えばですよ、できない子に何とかサポートする、そういう取り組みってできないかなとか、あるいは「よのなか科」という話がありましたけれども、いろいろな地域の大人たちが第一線で活躍して、いろいろな社会で働くとか、お金を稼ぐとか、あるいは地域に、社会に貢献するとかって、どんなことなの、ということをお子たちに直接いろいろなところ、多様な職業のね、実態というか、ものをつなげていける、そんな場面も作れたらなど、そんなことを常々感じているんです。

私は実はこの間、逗子高校に行って、高校3年生に40分ぐらい、市長という立場で、どんなことを考えながら生きているのかみたいな話をしたんですけども、そういう話をしてくれたら、すごくいいなという人が逗子にいっぱいいらっしゃると思うんですね。そういうのが、例えばこの地域本部がいろいろなアイデアを出して、もっともっといろいろな子供たちの生きる視野とか経験とか、大人とのかかわりとかが広がっていくといいななんていうことを願っています。

【平】 本当にそのとおりだと思うんですね。中学校の場合の先生というのは、教科が決まっていますから、ある意味スペシャリストの先生の集団だと思います。ただ、小学校の場合というのは、担任の先生はオールランダーなんですね、基幹の9教科。8教科ですか、いろいろな形で教えながらやっていく。しかもこの今の逗子の情勢の中で、若い先生がどんどん増える中で、なかなかオールラウンドに通りは学習指導要領をちゃんと教えることはできるんだけど、スペシャリストとしての指導というのはなかなか難しいというのが、これはもう、それを期待するのはなかなか先生に難しいところだと思うんですね。その中でも地域支援本部の中で、その地域でそういったスペシャリストがいっぱいいるわけで、そういった人たちを活用して、学習の深化を図っていこうという、そういう狙いをすごく持っています。今、市長の話で九九という話がありましたけれども、それも一つ僕の中でアイデアがあって、各学校にあるふれあいスクールなどを利用して、何とかそういった活動ができないかと模索中です。

こういったことが、なかなか一朝一夕にできないなというのが本当に実感しているんですけども、先ほど逗子小学校の保護者の方には、なかなか活動する人が集まらないというのも、PTAから始まって、こうした活動に携わって7年目なんですね。その中で、本当に地域の格差を感じたところであります。ただ、その中でこの地域支援活動というのも、小学校のPTAから始まったんですけどもね、特に役員さんですとか、各委員長さん、委員会の方にも口を酸っぱくして言ったのは、ぜひ皆さん笑顔で活動してくださいねと。コーディネーターが楽しく活動することで、それが伝わっていきますよということを発信していきました。本当に逗子市で今、3年目、和田中で8年目。その中で活動がつくられていくか。なかなか一朝一夕にできないけれども、根気強くチャレンジしていく。先ほど二瓶さんの話にもありましたけれども、地域というのは変わらない。ずっとその場にある続けるのが地域ですから、その地域の力を一つ一つ丁寧に発掘して手当てをしていくのが大事なかなと思っています。

【平井市長】 土曜日寺子屋ね、地域の人がいろいろ教えてくれるんでしょう。それがどんな雰囲気なのか。僕は高校生にしゃべった時に、しゃべり方とかって、すごく悩むわけです。伝えたいと思っても、なかなか年ごろの高校生だから、斜めに見てね、聞いてくれなかったり、いろいろ、どんな言葉がいいのかなって、すごく悩むんですよね。中学生に対して地域の人がいろいろなことを教える時と、教え方の上手い人も下手な人も、思いが先行する人もいないじゃないですか。それがどこまで許容して、どうやってその先生が関わって、それはちょっと困るよみたいなね、コミュニケーションしながら、うまく運んでいるのかなというようなことを知りたいんですけど

ね。

【代田】 高校生以上に多分中学生の方が、ばらつきもあるし、思春期ド真ん中なので、ほかの人の指導、すごい難しいなというふうに思います。地域本部の歴史の中で、外部の地域の人たちや、大学生が教えることを学校が許容できたのが一番大きなハードルだったんじゃないかなというふうに一番思います。なので、当初一番あったのは、地域のおじさんの教える教え方が悪いというのが数学の先生から出ました。また、大学生が「ばか」とか使っちゃって、その指導に対して学校長からすごいきつく言ったりとか、またまた大学生がすごいリアルな話ですけど、個人情報、生徒の情報をほかの生徒に言っちゃったとか、すごい細かいこと。もう細かいことのオンパレードだったんですが、それを紡ぐように解決してきました。まずはルールを決めますよね。こういうやっぱり教えるには、10カ条、個人情報の問題も含めて、こういうものをやる。それは課題となって出てきたから初めて解決しようと思ったんですね。それを僕が行ったときに、1年間で来る人の規約は作りました。それはやっぱりガイドラインを決めないと、誰でも入ってきていいといたら、学校としては困る。でも、ある程度の今度は自由を決めておかないと、おじさん、入ってこれませんよね。おれは英語のスペシャリストだったんだよという人、来ます。何か教えたい。でも、学校としては数学を教えたい。先ほどありましたように、数学のつまずきの問題は、すごい大きな問題です。中学校だと、全部方程式、解けないですよ。どこでつまずいたか、よくわからない。でも、それを教えてくれる人材がいたら、すごくいいです。それを今、雰囲気としては大体100名、90名ぐらいの子供たちが1年生を中心にいます。4人一組ぐらいのテーブルで一つになって、勝手に自習しているんですね。そこ、4人一組のところに座って、質問を受け付けている。1人だと嫌になっちゃうので、ちょっとローテーション。島としては20ぐらいの島があるので、4人一組のローテーションをしたらば、いろいろなお隣とやるというスタイルになっています。で、数学をやったり、国語もやったりとかをしています。それで、まさに寺子屋的な授業を展開しています。

その時に、やっぱり自由度を認めるという意味で言うと、最近先生方もすごく規律は最大限よかったし、服装の問題も、だめだったら必ず制服にさせます。要は私服で出てはいけない。そういう細かいルールをしながらも、大分先生方の信頼も得たので、今は僕、いいなと思っているのは、いろんな難しいことを言う大学教授も来ているんですね。大学教授、時々来ているんだけど、わからないんです、大学教授の話は。でも、大学教授の話はわからないということが中学生にわかっています。要するに、中学生のセンスはすごくいいということもわかるから、これが多

様性で、なるほどいろいろな摩擦とかあって、地域本部だなという、そこまではだからまわっていたわけです。そういうところが8年かかったので、そういうところをコミュニケーションの一つ一つのコミュニケーションをつむいでいたり、細かいことをやっていたというのが今現状なので、そこはだから歴史をたどって今はあるけど、また今度一つ問題が起こっているのは、多分また修正されるだろうと思いますけど、そういうふうな歴史は繰り返されると。大事なのは、みんなでいい子を育てよう、これがぶれなければ、思いは同じなので、多少その手法を、方法論をどう制度化させるかということが大事かというふうに思います。

【平井市長】 はい、ありがとうございます。ローマは一日にしてならずですね。つい、和田中ってすごいなあと思っていますけど、本当に積み重ねた努力とね、先生の思い、校長先生の思い、地域の思い、保護者の努力があって、今日があるんだなと感じますね。どうでしょう。じゃあ。

【市民】 先ほどのお話の中で、校長先生が呼び込むということが非常に大事だと言われたようですが。今の「よのなか科」の話なんですけれども、そのもうひとつ前に、スローガンとして、僕たちは何のために勉強するのというテーマが、大テーマが学校の中に通っているわけですね、まずね。そうすると、自分の勉強はどんなふう役に立つ。何をやりたいから、どんな勉強ができる、すべきであるというふうなつながりなんで、何のために勉強するのということに「よのなか科」がすごく働くんだと思うんです。

そこで、ちょっとこれは単純な質問になってしまうかもしれませんが、ああいう年に50回の非常に有益な講座をですね、学校のカリキュラムの中に入るのか、それともプラスアルファみたいなものか、その接点になるのか。あるいは、接点とすれば、先ほど聞いたお話ですけども、講師が来て話をするんじゃないくて、みんなが考える中に講師が入るんだというふうな形でやるのか。例えばそれが先ほどお話があった、半分わかったような気がするんですが、要するに非常にカリキュラムがいっぱいいっぱいで時間が足りない中で、「よのなか科」はどういう形で、どういうふうに溶け込んでいるのか。あるいは、それは校長さんの采配になるかもしれません。そこだけちょっと教えていただきたいなと思います。非常に大事な有益なお話しでした。

【平井市長】 プログラムを考える人は誰なのか聞きたいですね。

【代田】 すごい学校現場で難しい話になります。すごく簡単に言いたいなと思いますが。カリキュラムの「総合的な学習の時間」というコマでやります。要は、だから学校の授業の範囲で、国語と数学、9教科と同じ位置づけでやります。ただ、中学校の場合、来年度から新学習指導要

領で、大きな流れとしては、ゆとり教育の目玉が「総合的な学習の時間」で、まさに地域の人たちといろいろなことをやろうという時間が担保されたんですが、来年度からそれが少なくなります。週で言うと2コマくらいが平均になっちゃって、普通の学校でいくと、その2コマってどういうふうに使われてしまう傾向があるかという、音楽会の準備、運動会の選手決めという、学活活動の延長線上で使われるケースが多くなっちゃうんですね。で、和田中学校もだんだんそれになっちゃうということになったので、どういう工夫をしたかという、これちょっと特色なんですけど、時間数を50分を45分にしたんです。コマ数を多くして、32コマでやろう。今、新学習指導要領は1週間ですと28コマ。多くしておいて、「総合的な学習の時間」をコマ数として担保を多くしようということで、来年度からも「総合的な学習の時間」が減らないように、4年前から準備を、私が来たときから移行期間だったので準備をして、この程度できるかなというふうにやりました。ですので、学校の授業内に位置づけて、しかもそれが減らないようにやろうというふうに思っています。質問の前段はそれですよ。

2つ目、誰がプログラムをつくるか。これは基本的には私が中心で作って、「よのなか科」を学校全体のプログラムにしたかったので、私が来た2年目から分掌という、学校の中で分掌という組織があって、生活指導を一緒にする形、要は学年教科と、もう一つ分掌という組織があって、新しく「よのなか科」、キャリアを考える分掌部会で進路企画部というのを作って、こういうことを積極的にやりたい先生方と1週間に1回、ディスカッションをしながらやっています。要するに、僕がいなくてできない体制じゃないのを何とか作りたいなというふうには思っていますが、私自体やっているところも、なかなか力が抜けないので、個人的な力量を何とか仕組みにしたいなというのが今現状です。

【平井市長】 ありがとうございます。要するにキャリア教育みたいなものですかね。今風に言うと。文部科学省もキャリア教育やれとって旗振り始めているんですね。あと5分ぐらいで所定の時間になっていくんですが、どうでしょう。

【市民】 すいません。先ほど「よのなか科」はいいけれども、夜スペとか寺子屋云々でちょっとどうなんだという話をしたんです。話を聞きまして、寺子屋の部分、よくわかりました。ただ、英語コース、検定の部分なんですけど、ちょっと費用的に大変かなと思います。小学校の教員なんですけど、保護者の方もいらっしゃるんですが、子供、疲れているんですね。例えば小学校…中学校の現場はよくわからないんですけど、中学生、うちの近所に塾があって、夜遅くまで勉強していると。その中で、やっぱり私としては子供たちを教えている中で、とりこぼしちゃうけ

ないという気持ちでやっています。そのプラスアルファの部分で、やっぱり子供たちに親がすることは、どうしたら幸せになるのかとか、先ほどの損得じゃなくてという部分も含めて、そういう時間をやっぱり保障してあげたいかなと。やっぱりじっくり話す時間とかというのを持っていたきたいなと。だからこそ、さっきの夜スペとか、夜勉強するというのは、学校でね、ちょっと違うのかなと思ったんですけど、ただそれが子供たちが体力的にも気持ち的にもモチベーションのある状態で、好きでとか、楽しい状態のできるならばいいのかな。ただ、それがプレッシャーとなって、周りの成績が上がったからもっともっと頑張らなくちゃというふうにやっていると、結構後々きつくなるのかなという部分で、どうかなと言った部分であって、寺子屋の部分の話を聞いて、納得いたしました。ありがとうございます。

【平井市長】 はい、ありがとうございます。子供は今、すごく忙しいんですね。ぜひ保護者の方から今の子供の生活と学校と、思うところがあればおっしゃって…あ、手が上がりました。どうぞ。

【市民】 小学校と中学校の子供がいるんですけども、本当は塾に行かないで、学校で全部学んで欲しいというのが親全員の願いだと思うし、子供も勉強がちゃんとできるようになるのは、塾に行っているからだと思っている子たちが多いようなので、それは本当はちょっと…。じゃあ学校に行っている時間は友達とのコミュニケーションのためだけだったのかというと、本来の姿じゃないと思うんですね。でも、実は小学校の読み書きそろばん、さっきお話しをいただいた、読み書き計算というのが出ましたが、ああいうのは学校の普通の授業だけで身につけるのは、時間が絶対的に足りないと思うので、本当は家庭学習というのが一番大切で、それが今、共働きだとか、家にいれないということで、家でできないとなると、そこで地域の人の力で寺子屋というのが考え方として出てくるのかなと思うんですよ。今、秋田県の何か学力がすごく上がったのは、上がっていた背景には、学校と家庭の連携があって、家庭学習を学校の指導で進めているということを知ったんですが、それが親が例えば一生懸命その中から家庭での学習が必要だなと思っても、周りの子供たちが親の考え方の違いで、計算とか漢字とか、本当の基礎の勉強してやっているだけなのに、すごい勉強している。それが勉強だ。うちは宿題すらもやらないみたいなことを平気でおっしゃるお母さんたちがいたりして、そういう意識の違いがクラスの中で一つあると、クラスがやっぱり勉強する子としない子、勉強に興味がある子とない子と、クラスの中にまとまりがなくなり、先生方が教えにくくなる。そういう状況があるということ、小学校でも中学校でも実はそれがあるということ、本当は子供たちからよく聞いて、知っているのは保護者かな

と、私は実は思っていました、それを小・中のPTAとかを関わっていて、すごく思ったんですね。地域の方々、それに関わってくださるといのはすごくうれしい、今回もこういう4つの講座のずし楽習塾というので地域の方がこういうことをしてくださっているんだというのを知って、私はすごく感動したんですけれども、それは保護者が、私たちが、自分の子供たちが学校に実は行っているのも、それを知らなきゃいけないなと思ったことと、あと、それを発信して、実は学校の側にもうちょっと主導を握っていただいて、実はその上の教育委員会だとか市長さんだとかにビジョンを、それこそ本当にわかりやすい、代田先生のようにわかりやすい、家庭では健康管理しっかりやってくれと、それをちゃんと実例を示して、こうなるんだという効果も示して、してくださると、家庭もわかりやすく、それをやっていこうというふうに思う人たちが増えてくると思うし、それがどんどん発信してくださることで、そういったことを広めることで、子供たちも親から意識を植えつけられ、それがクラスもまとまっていき、ほかでは先生が「よのなか科」というので子供たちの意識も高めてくださる。考える力もつけてくださる。そうするときと普通の科目でも絶対に集中力が上がってというふうに、いろいろなところでそういうかかわることができるんだなというふうに思います。私は保護者としての立場なので、そういった皆さんが考えてくださっていることを感じながら、保護者としてのやっぱり家庭学習も大切だということも思って、それをできれば周りのお母さんたちにもわかって欲しいなというのを。ただ、プロじゃないので、自信を持って言えないので、やっぱり学校にいてほしいなというのを、こういう場で私はちょっと勇気を持って発言してみました。

【平井市長】 はい、ありがとうございます。5時過ぎましたけどね、学校支援の地域本部のテーマを取り上げたまちづくりトーク、もう何回やりましたかね。1年に1回ずつぐらいやってきて、今まではどうやったらこの地域本部というのがね、皆さんで共有されて、それがもっともっと活性化して発展していくのかなという議論で今まできたんですけれども、ようやく何か逗子の中でどういう教育を作っていくんだ。それは学校だけじゃなくて、地域、保護者、いろいろな人がかかわって、子供たちにどういう学びと、それから社会に自立してね、生きていける、そういう場を逗子市としてつむぎ出していくのかなというところに何か議論が発展したなって、しかも、今日は教育委員さん、あるいは校長先生、現場の先生方、そして保護者の方、地域本部でかかわっている方、そして逗子の外側でも、和田中の校長先生も来ていただいて、何か時間が短くて本当にももの足りないかもしれないんですけれども、すごく何かいいコミュニケーションができたなと、ちょっと私もようやくここまで来たなというのを何かしみじみと感じました。何か言い足り

ない人があれば。最後にじゃあ代田先生から、今日1時半から本当に長い時間かかわっていただいて、最後こうして逗子の市民とコミュニケーションしていただいたので、ご感想あるいはメッセージをお願いしたいと思います。

【代田】 今日はどうもありがとうございました。まず本当にびっくりしたのは、こういう仕組みで話したところがないので、開かれた行政だなという部分も感動しました。今日は本当に私自身も楽しい時間を過ごさせていただきましたし、皆さんの意見から参考になることもありました。

最後としてはですね、ちょっと今、さっきの質問に絡むんですけど、和田地区は土曜日に勤めている方が圧倒的に多かったという発想があったんです。夜に帰って、誰もいないということもあって、今、夜スペが月2万4,000円なんですけど、東京都の場合は塾費を30万円がキャッシュバックされる、生活支援を受けていると。こういう事情で、8年前までずっとそれに甘んじていたわけです。学力最下位、甘んじていたんです。でも、発想を転換してみよう。こういった地域には地域の力があるんじゃないかというのをやったわけですね。藤原先生がすごかったのは、前任だからすごいな。ブレイクするから、誰にも語らずに夜スペをやったわけですよ。吹きこぼれをやります。違うんです、本当にやっていることは。地域で、どこにも行けない子たちを救っているんですね。地域それぞれの事情があってできること、それも親身になって、あの子の幸せにとってどうなるんだというふうなスタンスで考えた時、いろいろやるべきことがあって、子供たちに新学習指導要領では、考える力というのを求めています。今一番必要なのは我々であって、我々が考える力を使って、この子たちにどういう施策がいるか、それを実行に移すこと、これが大事だなというふうに思っています。和田が全然進んでいるとも思ってなくて、全国で視察に来たところはおもってやっている。もう夜スペをまちごとやっているところ、いっぱいあります。というのを皆さんと一緒にやって、それぞれだから世界で一番通いたい学校といった時に、それは全部あっていいわけですね。地域の人たちが選ぶわけだから、そんな総体論で語るのではなくて、この逗子の中で一番いいスタイルというのは、逗子オリジナルで多分できると思うし、逗子市のこの自然というのは、私も鎌倉にいますので、よく山に登りますけれども、そういった自然とか海とかを使って、世界にないこの逗子の教育というのは、すごく可能だし、逗子市の由来はちょっと聞いたことがあるんですが、この子供を育てる、そういう環境の中、恵まれた環境もあると思うので、それを短所を長所に切りかえながら、ぜひすばらしい教育をまた作っていききたいし、情報交換していききたいなというふうに思います。どうも今日はありがとうございました。

【平井市長】 本当に短い時間だったんですけども、これだけ多くの方が本当に集まっていた

だいて、逗子市の教育を語り合えたというのは、本当に私も大きな喜びの1時間でした。今日は本当にどうもありがとうございました。

【司会（福本課長）】 皆さん、どうもありがとうございました。

最後にご案内とお願いになります。まず、皆さんのお手元に、アンケートを配らせていただきます。次回、あるいは今日のテーマについて何でも構いません。お書きいただければ、私どもの参考にさせていただきますので、どうぞよろしく願いをいたします。書きましたら、お帰りぎわ、出口に職員が立っておりますのでお渡してください。

もう1点、ご案内ですが、次回のまちづくりトークは来年1月31日に開催します。火曜日になります。平日ですが、テーマはゼロ・ウェイスト、言い換えればごみゼロのまちということです。これを目指して、家庭ごみをどうやって減らすかをテーマに開催します。小さなお子さま連れでも楽しめるイベントを用意しますので、親子、あるいはおじいちゃん、おばあちゃんとお孫さんといった3世代でご参加いただけたらなと思っているところです。1月号の「広報ずし」でご案内いたしますので、詳細はそちらの方をご覧ください。

では、以上をもちまして終了とさせていただきます。どうもありがとうございました。